

CULIB NEWS

Vol.93

2024. 2

★目次★

- ☆広報班厳選！おすすめ書籍紹介 … 1
- ☆図書館ボランティアについてインタビューしてみました … 6
- ☆ショート・ショート募集企画 … 12
- 最優秀賞**
- 『手は届かない』 増鏡 … 13
- 『木の恋』 長谷川凡昏 … 15
- 優秀賞**
- 『ひと夏の恋』 天野奈袖多 … 16
- 『蕾』 悠奈 … 18
- ☆SNS 紹介 … 21
- ☆編集後記 … 22

広報班厳選！おすすめ書籍紹介

今回のクリブニュースでは、広報班のメンバーが「この本は面白かった」「他の人にも読んで欲しい」と思った本を自由に、好きなだけ紹介していきます。あなたの心に残る一冊が見つかると思います。(^^▽^^)/

《図書館の所在地》

NL（名古屋図書館）：名古屋キャンパス 1 号館 1～2 階

→名古屋図書館では、在学生だけでなく一般の利用者も受け入れています。学生のグループ学習スペースであるラーニング・スクエアの他、個人学習室などを備えています。

LSC（ライブラリー・サービス・センター）名古屋キャンパス 0 号館 3～4 階

→LSC は中京大学の在学生を対象とした図書館です。ほとんどの資料が開架であり、手に取って閲覧することができます。さらに、DVD などの視聴覚資料も視聴することができます。

LLC（法学文献センター）：名古屋キャンパス 9 号館 1 階

→法学部に関連する資料が所蔵されている図書館です。閉架書庫も充実しているため、資料探しをするときは、閉架の図書を探してみるのもおすすめです。

TL（豊田図書館）：豊田キャンパス 10 号館 2～3 階

→現代社会学部、スポーツ科学部、工学部といった豊田キャンパスに所属している学部に関連する資料が収集されている図書館です。

皆様のご利用をお待ちしているんだぶ〜♪



『まるで童話のような、世界のかわいい村と美しい街』

本の概要

この本は、世界の美しい景色やまるで童話のような景色を撮影した写真集です。一度本を開けば、異世界に迷い込んでしまったかと思うほどの写真を見ることができます。

どんな人におすすめ？

単純に旅行好きな方や写真が好きなお勧めしたい気持ちもありますが、それ以上に私は創作をしている方にこの本をお勧めしたいです！
「作品の舞台が思いつかない…」 「イメージが固まらない…」 という方にも、実際の写真が使われているため、想像力が膨らんでいくのではないのでしょうか。

書誌情報

タイトル：『まるで童話のような、世界のかわいい村と美しい街』

執筆者：加藤希

出版年：2015年

出版社：パイインターナショナル

ISBN:9784756246936

NDC：290.87

所蔵館：LSC（ライブラリー・サービス・センター）



『はてしない物語』

<おすすめポイント1>

この本は、電子書籍が流行する世の中でも紙の本で読むことでより面白さが広がります。

特にハードカバーがおすすめです。

何故ならこのハードカバーは物語の中に登場する本とまったく同じ装丁で、主人公がこの本を読むことで物語が始まっていくからです。物語とも要所要所で密接に関連しているため、この本だけはハードカバーに特別な価値があることが読めばわかります！

<おすすめポイント2>

主人公と第三者の主観と客観という 2 つの視点があるため、共感しやすい事に加え言葉遣いが繊細で文章の中の光景が美しい！

周囲を見返したい、周囲に認められたい、褒められたい、頭が良いと見られたいなどと年相応の幼稚な感情が、誰かと一緒に居たい、愛し愛されたいと、切実で得難い願いに変化していきます。

私は愛情を求め、愛情を返していく主人公の心の動きがとても美しいと感じました。

今でも読み返す度に嘘をつくのをやめようと思う程、心に響く魅力があります。

子供の頃に読んでおきたかったと何度も実感していました。

もし子供を授かった時には読ませてあげてみてはどうでしょうか。

★書誌情報

タイトル：はてしない物語
著者：ミヒヤエル・エンデ
訳者：上田真而子、佐藤真理子
出版年：1997年
出版社：岩波書店
ISBN：4000920456
NDC：948
所蔵館：NL（名古屋図書館）
TL（豊田図書館）



『夜は短し歩けよ乙女』

とあるめんどくさい大学生と、素直で純粋な黒髪の乙女の青春を描いた小説です。

1 ページ目から最終ページまで、森見登美彦先生全開の楽しい文体で書かれているので、読書に不慣れだという方にもおすすめしたいです。気軽に読んでみて欲しいです。

とっつきやすいというほど気安くもなく、しかし構えるほどの重さはなく。

じわじわとクセになる文章表現にのめり込み、ページをめくっていけば、気が付けばそこは沼。

章ごとに話の筋が分かれていて、それぞれの物語の雰囲気丸きり違って見えてくるところも読みやすいポイントです。

賑やかでありながらもどこかしっとりした夜の冷たさを感じる春。古本に囲まれ火鍋を囲むあつつい夏。学園青春コメディなお祭りの秋。風邪で一人ぼっちのさびしい冬。一冊で色々な楽しさが詰まっている、バラエティあふれる小説にぜひともひたっていただきたいです。

長い小説を読み切れない、疲れるという方に、まずはひとつ。

登場人物も多彩で、読んでいてとても楽しいところにも注目です。

恋に向かって彼は歩き出す。けれど大きな一歩は踏み出せない。それでも彼女の足取りを必死に追いかけて、彼女と過ごすささやかな時間を強く求めている。そんな彼を、微笑ましく思いながらもなぜか深く共感してしまう！

書誌情報

タイトル：夜は短し歩けよ乙女

著者：森見登美彦

出版年：2006年

出版者：角川書店

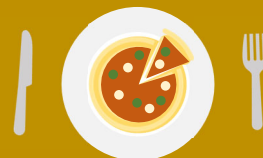
ISBN：4048737449

NDC：913.6

所蔵館：NL(名古屋図書館)
TL(豊田図書館)



キッチン



《あらすじ》

「私がこの世で一番好きな場所は台所だと思う。」この一文から始まるこの作品。唯一の肉親である祖母を亡くした主人公、桜井みかげは葬式で出会った田辺雄一という青年の家に居候をすることを決心しました。田辺家との出会いをきっかけに周囲で起こる出来事などを通して、彼女が自身の人生を歩んでゆく姿が描かれています。

《お勧めしたいポイント》

孤独や愛、喪失といったテーマを探求しながら、料理と食べ物の象徴的な意味を通じて人間関係や生活の意味を描いています。全体的にふんわりとした柔らかい雰囲気でも物語は進んでいくのですが、どうしても悲しみに直面し、読んでいて胸が痛むようなシーンも含まれています。私は身近な人の死を体験したことがなく、どのくらいの精神的な負担に苦しめられるのか断言できませんが、作者の表現力により胸がきりきりとするところがありました。人が死ぬ作品はたくさん触れたことがありますが、ここまでも「死」というテーマひとつで物語が進んでいくものは見たことがありませんでした。だからこそ、「死」を身近に感じたことがなかった人でも、より身近に感じるきっかけを与えてくれるような作品だと感じました。



書誌情報

タイトル：キッチン

著者：吉本ばなな

出版年：1988年

出版社：福武書店

ISBN: 4828822526

NDC: 913.6

所蔵館：NL（名古屋図書館）

図書館ボランティアについてインタビューしてみました

私たちクリブニュース制作班を含めた、中京大学図書館協働ボランティアについてご紹介！
現在進行しているイベント企画やボランティアメンバーからのアドバイスなどをインタビューしました。
まずは今回、取材に答えてくれたメンバーを紹介します★

インタビュー日
2023年9月5日

広報班



くりぶー



あやね



ゆいと



なな



こうた

企画班



榊江



小川



河本



荒野



小島



藤井



朱華



あやね：今回は中京大学図書館協働ボランティアの「企画班」として活動しているメンバーにお話を伺いました！



榎江：よろしくお願ひします！



ゆいと：質問①です。

「主にどのような活動をしていますか？」



朱華：私たちは選書ツアーや企画展示などの図書館に関するイベントを提案・計画し、運営しています。



こうた：おお！

私たちが図書館でイベントを楽しむことができるのは、皆さんが企画してくれているおかげなんですね。



河本：そう言っていたけると嬉しいです！



なな：では、質問②に行きましょう。

「今後の活動はどのようなものを考えていますか？」



小川：「企画班」では現在、図書館で企画展示を開催する「展示企画班」と、選書ツアーを開催する「選書ツアー班」という、二つのグループに分かれてそれぞれ実行のための計画を立てています。今後は今年度中にこの二つを実施することが目標です。



ゆいと：それは楽しみですね！

どんなイベントなのかワクワクします！



こつた…では、質問③に行きます！

「図書館ボランティアで一番印象に残ったことは何ですか？」



荒野…一番印象に残ったのは、活動の自由度が高いということです。

わからないことがあれば職員の方がアドバイスしてくださるので、自分のやりたいことがあれば積極的に提案することができます。ただ、その分責任も伴うと思っています。



なな…それは私たちも実感しています！

何気ないアイデアが実現できるのも魅力の一つですよ。



小島…そうですね！

企画を考えるのが楽しくなります。



ゆいと…最後にこれからボランティアに参加したいと

考えている方々に向けて一言お願いします。



藤井…ボランティアは自主性が求められます。

大変なこともあります。やりたいことがある人にとってはやりがいのあることだと思います。少しでも興味があれば、ぜひ参加してボランティア活動を盛り上げてくださるとうれしいです。



あやね…質問は以上になります。

「企画班」の活動について知ることができてよかったです。続いて、「広報班」の活動をインタビューしていきたいと思います！



くりぶー：「ちよつと待しじ〜し〜！」



ゆいと：「わあーくりぶー、そんなに大声出してどうしたの？」



くりぶー：「図書館協働ボランティアのことなら、「くりぶー」を忘れてもらっちゃ困るが〜」



こつた：「くりぶーって怒ると髪の毛が動くんだ〜！
そ、そっだったね！」



あやね：「なんか、かわいいかも〜！
じゃあ、私たち取材してください！」



くりぶー：「もちろんだが〜！まずは質問①から〜」



くりぶー：「主にどのような活動をしていますか？」
なんだぶー。



あやね：「私たちは、図書館のイベントや図書館に関する情報の広報活動をしています。」

現在力を入れているのは、中京大学図書館の館報である「クリブニュース」制作です。
完成に向けて、広報班一丸となって頑張っているので、ぜひご覧になってください。



くりぶー：「クリブニュースが完成した暁には、
図書館公式X（旧Twitter）、Instagram、
Facebookでお知らせするが〜、
見て欲しいんだぶー！」



なな：「図書館の公式SNSに関しては別ページに詳しくまとめました。」



くりぶー：確認してくれると嬉しいぶー。

続いて、次の質問だぶー！

「今後の活動はどのようなものを

考えていますか？」



こうた：今後の活動としては、新たに始動した中京大学

図書館の公式 Instagram の「コメント」を充実

させることが目標です。

もちろん、クリブニュース制作も継続して

いきます。

皆さんの「コメント」が励みになるので、いつでも

「意見」を「コメント」欄に載せてください！



くりぶー：この目標は応援したいぶー！頑張るぶー！

じゃあ、どんどんインタビューも

進めていこうぶー。



くりぶー：「図書館ボランティア」に参加して、一番印象に

残ったことは何ですか？」なんだぶー。



なな：一番印象に残ったのは、「クリブニュース募集」

企画のショート・ショート作品の審査です。

作品それぞれに個性があり、大変魅力的なもの

ばかりでした。

そのため、優秀作品を選ぶのにとっても苦労

しました。



あやね：迷いすぎて「私たちでは作品の良さを

伝えきれないんじゃないか？」と思った時も

あったほです（苦笑）



くりぶー：作品を読むのが楽しみになるんだぶー♪



くりぶー：続いて、これからのボランティア活動に対する
意気込みを聞かせて欲しいぶー。



ゆいと：私たち「広報班」は、より多くの方に中京大学
図書館をご利用していただくと同時に、すでに
ご利用されている方にも、さらに多くの情報を
発信していきたいと思っています。
これからも、皆さんが図書館と深くかかわって
いけるように頑張つていきます！



くりぶー：それは頼もしい意気込みなんだぶー！



あやね：もちろん、くりぶーも一緒に頑張りましょう！



くりぶー：当然なんだぶー！

じゃあ、最後にこの質問をするんだぶー。
「これからボランティアに参加したい人に
アドバイスはありますか？」



こうた：私たちは「企画班」と「広報班」に分かれて

活動しています。
各班の活動内容にはそれぞれの良さがあり、どちらを
選んでも達成感を得られます。
自分がやりたい活動を想像するのもいいと思います。



くりぶー：これからボランティアに参加してくれるメンバーが

参考にしてけると嬉しいぶー。
質問は以上なんだぶー。



あやね：ありがとうございました！

クリブニュース SS(ショートショート)募集企画

今回の募集では短い期間の中多数のご応募ありがとうございました。

ご応募いただいた作品を文学部の先生方にもお見せして、優秀な作品にはコメントをいただきました。

結末予想部門

2500字以内でお題を含めた物語の結末を考えることを目的とした部門です。

お題	向かい合って本を読む男女
	女性が本を片手に立ち上がる。

募集期間

2023年7月20日

～

2023年8月31日

自由創作部門

2500字以内で独自の世界観を作品にまとめることを目的とした部門です。

文字数に収まれば、何でもありの個性豊かな作品が集まりました。

①結末予想部門最優秀作品

タイトル：『手は届かない』

作者：ますかがみ増鏡

②自由創作部門最優秀作品

タイトル：『木の恋』

作者：はせがわほんくら長谷川凡昏

③結末予想部門優秀作品

タイトル：『ひと夏の恋』

作者：あまのなゆた天野奈柚多

④自由創作部門優秀作品

タイトル：『蕾』

作者：ゆな悠奈

結末予想部門最優秀作品

『手は届かない』 増鏡

かたん。音がした。誰かが椅子から立ち上がったような音。静寂に包まれた図書室の中で、それは異様に響いた。さっき本を返しに来た男子生徒が最後ではなかったのか。閉館準備をするついでに、音のした方を覗いてみた。その正体は女子生徒である。小柄な彼女は手を伸ばしていた。つま先のぎりぎりで踵を持ち上げて、僅かに震えつつも直立している。その片手には文庫本。もう片方のびんと伸びた中指の先には、世界文学全集。正直、ぎよつとした。図書委員でよく図書室に入り浸っている私でも、手に取ったことのない本である。そして、こんな事典以上に分厚い本を、そんなに細い中指で取れるはずがないだろう。脚立も使わないで、誰もいない図書館に低身長アピールの練習をしに来たのだろうか。このまま放っておいても良かったが、司書さんに見つかったら私が怒られてしまう。渋々脚立を持ってきて、取ってあげた。

「わ、すみません」

背伸びをやめた彼女は、思っていたよりも低身長だった。小柄な体で世界文学全集を抱える姿は、今にも落としまいそうで、見ているこっちがハラハラする。しかし彼女はお構いなしに、太ももに本を乗せながらばらばらとページを捲った。

「あつた！良かった」

大きな本の中に、小さな葉が埋もれていた。

「やっぱり、取り忘れたと思ってたんです。正解でした。すみません、これちよつと持ってきてくれませんか」世界文学全集と文庫本を押し付け

てきた。仕方なく受け取って、文庫本の表紙に目を落とす。ぎよつとした。あらすじが分かってしまう程長いタイトルに、更にサブタイトルが付いている。勇者やら転生やら書かれたそれは、明らかにネットが起源のライトノベルであった。私の腕の中で、文化の遺産である世界文学全集と、新生のライトノベルが奇跡の邂逅を果たしている。苦笑して彼女の方を見ると、悠々とサイズの合っていない制服のポケットにしおりを押し込んでいるところだった。

「……これ、貸出ですか」

「いえ。葉取るために取っただけです。文庫本の方は私物なので」

「色んなジャンルを読まれるんですね」

「ああ、はい。普段はこういう本は読まないんですけど」

彼女は恥ずかしそうに目を逸らして、もごもごと言った。

「この本、友達が書いてるんです。本を出すの、友達の夢で。これが初出版なんです」

「すごいですね」

素直な感想を言うと、彼女は嬉しそうに笑みを作った。

「ですよね！私も負けてられなくて」

「小説書かれるんですか」

彼女は、はつとしたような顔になってから、すぐに目を伏せる。

「……はい。言うつもりはなかったんですけど」

彼女は顔を染めて頬を掻いた。しばらくの沈黙。閉館準備の続きをしようかと思つたところで、彼女はあつと声を上げた。

「あの。取ってくださってありがとうございます。もう一つなんですけど、手の届かないものがあつて……。背、高いですし、代わりにお願いできますか」

今度は百科事典でも取らされるのだから。しかし、私は彼女に興味を湧いていた。小説家の友達や、それを目指している彼女の話をもう少し聞いてみたかった。快く承諾すると、彼女の顔がぱつと明るくなった。

「いいんですか！？ありがとうございます！こっちにあるんですけど」

小さな背中について行った先は、図書館の横の屋上に続く通路の前だった。

少し高い位置に取っ手が生えており、梯子のように天井の蓋まで続いている。私は思わずきよとんとした。そんな私を見て、彼女は申し訳なきように言う。

「屋上に用があるんですけど……。代わりに登って、これを開けてきて欲しいんです」

そう言っ、茶色い封筒を差し出してきた。ぶかぶかの制服の収納力は予想以上らしい。しかし、わざわざ屋上まで出向いて封筒を開けることに何の意味があるのだろうか。もしや彼女は相当おかしな奴なのではないだろうか。こちらが困惑しているのを分かっているのか、彼女はぐいぐいと封筒を押し付けてくる。

「本当にお願ひです、これであなたが損するとかはないので。私にはできないことなんです」

脚立持つてこいよ。そう思ったが、押しに負けて受け取ってしまった。封筒は思っていたよりも軽かった。

「因みにこれ、何が入っているんですか」

「えっと……。敢えて言うなら、私の全てです」

彼女がそう呟いた時、開いていた横の窓から突風が吹き込んだ。途端に私は目を見開いた。見てしまった。捲れ上がったセーラー服の下、赤黒く染まった彼女の体を。皮膚がべろりと剥がれて、臓器が丸見えだった。頭が真っ白になって、私はその場で固まってしまった。

「……すみません、お目汚しを」

彼女は、困ったような顔でぶかぶかの制服を整えた。そして、残念そうに微笑む。

彼女は虚ろな目をして、腕の中の文庫本を撫でる。

「その日はこの本の発売日だったんです。放課後、本屋に直行した後、葉を忘れてきたことに気がつきました。お揃いの葉で、お互いの書いた本を読むことが夢だったんです。慌てて学校に戻る、その最中でした。トラックとぶつかった後、ずっと立ち上がらなきゃって思っていました。」

でも意識が遠くて、体が重くて、熱くて、できませんでした。手が届きませんでした。葉にも、小説にも、夢にも……。でも」

彼女はじつとこちらを見つめてきた。瞳が宝石のように潤んでいる。

「あなたは、私の代わりに葉を取ってくれました。今、とっても嬉しいんです。恩人なんです。それに、いつも私の代わりに物を取ってくれた親友とそっくりで。私の全てを、あなたに託したいんです」

気づくと私は、屋上に立っていた。彼女の言われた通りに、封筒の口を開く。爪でこじ開けたそれからは、小さな短冊のような、細切れの紙がさらさらと出てきた。見覚えがあった。原稿用紙だ。そう気づいた途端、風が横を通り抜けて、紙吹雪のように空へと舞い上がった。慌てて手を伸ばしたが、虚しく空を切ってしまう。

封筒を裏返すと、有名な出版社宛の住所が書いてあった。

「私の全て……か」

短冊は全て空に吸い込まれてしまった。青くて広い空に向けて、手を伸ばす。遠い。空も。彼女も。手は届かない。

残酷な表現にちょっと引いたが、「女子生徒」の正体がわかる場面はぞっとした。こんな感覚はこの作品だけ。この叙述表現はうまくできているのに、結末は予想可能で今一つ。文章表現力を評価して順位一位とした。

酒井 敏先生

予想外の結末であった。文章がやや荒削りと思われる箇所もあるが、「彼女」の無念は伝わってくる。

中川 豊先生

冒頭からテンポが良く迷いが無い。立ち上がる音や（手は届かない）など、動作を重ねて時空を紡ぐ丁寧さが秀逸。少ない文字数にお題もストーリーも世界観も無駄なく完結させて見せた作として最優秀賞に推す。

河原林 晶子先生

自由創作部門 最優秀作品 『木の恋』 長谷川 凡昏

その木に心があると知ったのは、つい今朝のことだ。私は昨夜、大学から帰る道すがら居酒屋へ立ち寄った。軽く一杯引っかけつもりでいたが、飲み始めるとどうにも止まらない。諫めてくれる人もいないから、たちまち前後不覚に陥ってしまった。

そのまま家へ向かおうとしたのだが、足に力が入らなくていけない。あれよあれよと道を外れ、人気も段々無くなっていき、気付けばそこは林の中だった。大学の裏手にある大きな公園の、さらに外れにある空疎な一角。木の葉の隙間を程良く風が通るから、火照りを冷ますには丁度良い。私は額の汗を拭いつつ、数ある木の一本にもたれかかった。

しばらくは朗らかな心地で笑ったりしていたが、次第に馬鹿馬鹿しい気持ち膨らんでいく。何故自分はこの場所へたどり着いているのか。まだ若干重い頭を抱えながら、よろよろと体を起こす。はてさてどちらからやって来たかと、視線をキョロキョロ動かしていた時である。

つい先程まで身を預けていた木の幹に、おかしなものがあるのに気が付いた。

上方から僅かに差し込む月明かり。青白い光が照らし出すのは、不格好に刻まれた複数の線。横に長い三角形の下に、仕切りの棒と記号が記されている。誰の目から見ても相合傘に相違ない。ただ一つおかしなのは、書き付けられている名前が一人分だということだ。

詳しくは語らないが、凜とした雰囲気がある名前だった。それは所詮文字の羅列に過ぎないのだが、素面になりきれない私の目には、女性が

人寂しく佇んでいるように見えた。まったく馬鹿な話である。あの時の私は至極真面目に、彼女を独りにしてはいけないなど、勝手に盛り上がったのだ。

手頃な素材は無いものかと、足下を見渡してみる。視界の隅を小石がかすめ、すかさず震えがちな指で摘まむ。そうして私は改めて、樹木を傷物にした。小学生が黒板の前でチョークを握るように、普段よりも格好付けて文字を綴る。用意されていた空白を、最初から決められていたかのように、私は私の名で埋めたのだ。

それからの記憶ははっきりしない。気付いたときには自宅にいて、寝床から天井を眺めていた。気怠くてなかなか動けずにいたが、今日も今日とて授業がある。無理矢理布団を畳み、無理矢理身支度を調える。シャワーを浴び、朝食を作り、教科書や筆記用具のチェックに移った時だ。バッグをどれだけまさぐってみても、学生証が見当たらないと知ったのは。

どこで落としてしまったかと、前日の足取りを思い返す。大学で授業を受けて、帰宅途中で酒に溺れて——そうだ、あの林だ。きっとあの木の根元にでも、捜し物が転がっているに違いない。善は急げとばかりに、私は荷物を引っ掴んで件の場所へ向かった。

公園までの距離はそう遠くない。爽やかな朝日に導かれ、全速力で目的地へ駆け込んだままでは良かったのだが——青々と茂る光景を見て愕然とした。夜の闇に隠されていらない、ありのままの林はあまりに広い。これをしらみつぶしに探そうとすれば、どれだけの時間が掛かるだろう。やや憂鬱な心持ちになりながら、私は黒土の道へ踏み出した。

苔や落ち葉で覆われた地面は、どこを眺めても似たり寄ったり。昨晚の自分がどこを通ったのか、足跡を辿ろうとしても難しい。晴れた視界もかえって集中力を刮げ落とすから、何とも気が滅入る。果たして例の木を見つけられるだろうか、半ば諦めながら歩を進めていたのだが——数十分ほど周囲を彷徨った末に、全ては杞憂だったと分かった。

その木は明らかに異質だった。燦々と注がれる光のおかげで、相合傘が強調されていたのも勿論ある。けれどもそれ以上に目を引く要素が一つあった。花だ。若々しい緑色の葉はことごとく落ち、代わりに薄紅色の花が咲き乱れている。植物に詳

しくはないが、それが季節外れな事象なのは明らかだった。辺りの木々がお利口に振る舞っている中、彼女だけが奇抜な装いを誇っていたのだ。

結局、私は学生証を見つける前に林を出て、その足で大学へ向かった。地面にこんもりと積み上がった木の葉をかき分けるのが面倒だった、というのもある。だがそれ以上に、私は恥ずかしくしていたたまれなくて、もう一刻も早くその場から離れたかったのだ。今こうして授業を受けている間も、心が高揚して集中できない。

なあ、誰か教えてくれないか。私はどう責任を取ったら良い？

ラストシーンの木の様子が、読者の予想を超えて意表を突く。ショート・ショートとしての唯一の作品。

酒井 敏先生

幻想的な世界を無理なくまとめている。結末の「私」に共感した。小説執筆に熟れた印象を受けた。

中川 豊先生

梶井基次郎の『桜の樹の下には』や坂口安吾の『桜の森の満開の下』をほうふつとさせる。人間が恋に落ちる瞬間をリアルに描くことに成功した作品として推す。

河原林 晶子先生

結末予想部門 優秀作品

『ひと夏の恋』 天野 奈柚多

夏休みに入って一週間も経っていないある日、僕は図書館で読書をすることにした。近所の図書館はエアコンが強く、家にいるより快適に過ごせるし、ついでに今読んでいるシリーズの次巻も借りようと思ったからだ。

しかし、図書館に着いて空席を探したが、夏休みということもあって勉強をする学生が多く、ほとんどの席が埋まっていた。仕方なく部屋の隅っこにある四人掛けのテーブルに座る。ここはエアコンの風があまり届かず、いつも人がいない。それでも家にいるよりは涼しいため、すぐに読書に集中できた。

集中力が途切れた頃、本から視線を外すと、前の席に僕が一月ほど前に読んでいた小説を読む手が見えた。その小説は有名作家の作品ではなく、賞を一度取ったきりのほとんど無名の作家の本だった。もちろん映像化もされていない。そんな本を読む人なんて周りには誰もいなかったから、どんな人が読んでいるのか興味が湧いた。気づかれないように顔を盗み見る。

驚くほどに美人だった。透き通ったような色白の肌に、ぱっちりとした瞳。何より真剣に本を読んでいる眼差しに心奪われた。

パチッと目が合った。ぼうっと見過ぎてしまったようだ。慌てて視線を逸らすと、彼女は本を片手に席を立ってしまった。

気分を悪くしてしまっただろうか。しかし、前の席にはまだ彼女の荷物が置いてある。そのことにほっとし、読書を再開した。何分か経って、彼女が席に戻ってきた。今度は気づかれないようにちらっと見てみた。その手には僕が読んでいるシリーズ物の第一巻があった。

びっくりして彼女の顔を見てしまった。すると彼女は、微笑みながら小声でこう

言った。

「おすすめの本教えてくれる？」と。

まだ夏の暑さが柔らかい午前中、僕は今日も図書館に来ていた。いつもの席に座り彼女を待つ。

あの出会いから二週間が経った。毎日ではないが、結構な頻度で彼女と一緒に本を読んでいた。毎回別れ際に次に会う日の約束している。

昨日借りたミステリー小説を読み始める。タイトルに惹かれ、あらすじも読まずに借りてみたが、なかなか面白い。没頭していると、向かいの席にバックが置かれた。彼女のカバンだ。急いで顔を上げると微笑んだ彼女の姿があった。

「こんにちは。あれ、昨日の本もう読み終わったの？面白そうな本、読んでるね」

彼女は本を取り出して席に座った。

「こんにちは。昨日、帰り際に見つけたんだ。君が好きそうな内容だから、今度読んでみてよ」

僕がそう言うと、彼女は驚いた顔をしてから、嬉しそうに言った。

「私が好きそうなのって安楽椅子探偵ものかな？覚えてくれたんだ、嬉しい」

彼女は、はにかんだ笑顔を見せてから、カバンから本を取り出して読書を始めた。

僕はこの時間が好きだ。図書館の人が少ない隅っこ、僕と彼女、二人だけの空間。静かで穏やかなこの時間が僕は好きだ。

一時間ほどして彼女が本を片手に席を立った。読み終えてしまったのだろうか。しばらくしたら戻ってくるだろうと思ひ、僕は読書を続けた。

それからさらに一時間経ち、僕は昼食をとるためにお弁当を持って席を立った。彼女はまだ戻ってきていない。次に読む本を決めかねているのだろうか。先に会議室に行って待っていいようか。そう思ひ、僕は先に

会議室に向かうことにした。

会議室の入り口には、物寂しく「軽食コーナー」というドアプレートがかかっている。中に入り、いつもの席に座った。

一人でお昼を食べるのは久しぶりだ。彼女と仲良くなってからは二人で食べていた。

彼女はお昼を食べながら、いつも僕の話を楽しそうに聞いてくれた。学校でのこと、好きな小説や作家の話など、なんでも興味を持ってくれた。こんな人初めてだった。普段、本ばかり読んで、あまり人と話さなかったから、話下手でうまく伝えたい内容をまとめられなかったりした。けれども彼女は僕の言いたいことを汲んでくれて、僕を理解しようとしてくれる。好きにならないわけがなかった。出会ってから二週間しか経ってないが、彼女のことばかり考えるようになった。本を読んでいるときさえも、彼女の行動に気付くほどに。

いつもは自分の話ばかりしていたから、今日は彼女の好きなものについて聞こうと考えていた。しかし、お弁当を食べ終わっても彼女は来ない。どうしたのだろうか。僕は席に戻ることにした。

いつもの席には彼女の荷物がなかった。会議室に向かう前にはあったはずだった。彼女は何も言わずに黙って帰るような人ではない。きっととても急いでいて、会議室に行った僕を見つけれないまま帰らなければならなかったのだろう。

ふと、次に会う約束をしていないことに気が付いた。まあ、毎日図書館に通えばいつか会えるはずだと楽観的に考える。幸いにも僕には夏休み中に遊ぶような友人もおらず、予定は全くなかった。

待てど暮らせど彼女はあの日以来、図書館に姿を現さなかった。

夏休み最終日、僕は彼女に会いに行くことにした。夏休みが終わる前に彼女に一目会いたかった。

彼女の家は図書館からそう遠くない。これから彼女に会えると思うと、心臓が破裂しそうなくらい緊張した。

彼女が家から出てきたタイミングで声を掛けた。

「ひ、久しぶり。さ、最近図書館きてないけどどうしたの」

緊張で地面を見ながらぼそぼそと喋ってしまった。

顔を上げると彼女は心底汚いものを見るような眼をしていた。そして彼女は言った。

「キモッ」と。

僕は茫然と立ち尽くした。彼女は続けて言った。

「家、教えないよね？なんで場所知ってるの」

「そ、それはその……」

「そりゃ、ストーカーしてたなんて言えないか。私が席外してるときに私の荷物漁ってハンカチの匂い嗅いだり、リップクリーム盗んだりしてたの見てたよ、気色悪い」

「……僕のこと、好きじゃなかったの」「中一のアンタが大学生に好かれてると思った？こつちずっと見てるガキをちよつとからかってやろうかなと思っただけだわ。そしたらアンタがキモくなってきたから逃げたんだわ。今度その顔見せたら警察呼ぶよ」

警察という言葉に怖くなって、僕は走って逃げだした。

この夏の恋は、彼女と同じ大学の大学生になっても覚えてる。

最もショート・ショートらしい作品だと感じた。文章がこなれていないのが残念。一人称叙述を使うことを思いついたのは秀逸。より有効に生かしたかった。

酒井 敏先生

始めは図書館を通じて始まる初恋の物語なのかと予想していましたが、最後のどんでん返しに驚かされました。予想外な展開に私たちの中で強烈な印象に残った作品です。

クリブニュース広報班

自由創作部門 優秀作品

『蕾』 悠奈

大学の近くの図書館で本を読んでいた。自分が退屈そうにしている自覚はある。実際、退屈だった。目の前で熱心に本を読んでいる女性とは大違いだ。

正直、本は好きじゃない。そんな自分がなぜ図書館にいるかと言うと、ある授業のためだった。

文学部の「本を読もう」的な授業。正式名称は覚えていない。その授業で行われるビブリオバトルのために、必死に題材を探していた。

ビブリオバトル。一口に言えば、おすすめの本の押し付け合い合戦。今は、それで使う本を探して、バラバラと本を捲っているところだった。

突然、頭の上から声が降ってきた。

「あなたもこの本が好きなの？」

「へ？」という間抜けな呟きが、勝手に口から出てきていた。

女性がこちらを見て、目を輝かせている。どういう状況なんだ、これ。

手元にある本に視線を落とす。「国枝ショウ」という作家の小説。まだ数ページも読んでいない。

よく見ると、彼女の右手には同じ文庫本があった。

「その本、田舎の風景描写にすごく凝ってるの。まるで写真を見ているみたいだね……」

おれが黙っていると、突然彼女は語り出してしまった。

呆気にとられていると、彼女は大きな声を出したことを恥じて、小さな声で

「ねえ、この本を読んで、あなたはどう感じた？」と聞いてきた。

「えっと、次に会ったときには、言えるようにしておく」

なにも考えずに、勢いだけでこう答えてしまった。

彼女は、綺麗な顔でくしゃりと笑う。

「うん。楽しみにしてる」

その顔がどうしようもなく嬉しそうだったから、なぜか印象に残っていた。

彼女は宏邦ひろくに 梢こずえと名乗った。

どうやら月曜日の午後五時くらいは図書館にいらしく、先週と同じ時間に図書館を訪れると、彼女は同じ席で小説を読んでいた。

「こんにちは」

声をかけると、彼女は顔を上げた。

「えーっと…あ、そうだ。村田蓮むらたれん」

なぜフルネーム。なんて突っこんでいるときりがない。

「で、読んだ？この間の本！」

目を輝かせて宏邦が言う。圧がすごい。これはよほどのファンだな、と心の中で苦笑する。

「読んだ。面白かったよ」

「どんなところが？」

「ど、どんなところが？」

思わず聞き直してしまった。まさかそこまで詳細に聞かれるとは思っていなかったのだから、答えを用意していなかったのだ。

返答に困っていると、宏邦はあからさまに落胆した。

「やっと読んでくれる人に出会えたのに……」

そう言われると申し訳なくなる。でも、言い訳はさせてほしい。自分にしては真面目に読んだ方だし、この本はちゃんと面白かった。でも、どこか物足りない。それを、熱心なファンらしき宏邦に言うのはためらわれた。

返答に困った末の沈黙を、どう取ったのだろうか。彼女は、涙をいっぱい溜めた目でこちらを睨んできた。

「これ、読んで。今度はそんな感想抱かせない。絶対」

押しつけられた「蕾」という本を、返す気にはなれなかった。

翌週の授業で、宏邦梢と再会した。

「あれ。村田蓮じゃん」

「宏邦？」

正直驚いた。まさか、こんなところで会うとは。

「同じ大学だったんだ！しかも授業も一緒！」

宏邦はなにやら楽しそうだった。どうしてだろう……と思い始めたところで思い至る。今日のこの授業で、例のビブリオバトルが行われるのだ。

「紹介するの、国枝ショウの小説？」

肯定されると思っていたのに、宏邦はかぶりを振った。

「ううん。国枝ショウを紹介するのは、ちょっと違う気がして」

言っていることの意味がわからなかった。普通、そんな言い方はしない。言葉の真意が知りたかったのに、宏邦は「またね」と言って、さっさと席についてしまった。

授業が始まった。宏邦は有名作家の、有名な賞を取った作品について熱く語っている。勢いがつきすぎて、先生が若干引いていた。

その熱に感化されたからだろうか、人前に立って話さないといけないというのに、おれはほとんど緊張していなかった。それは、自分の番が来ても、それほど変わらなかった。

「僕が紹介する本は、国枝ショウの『蕾』です」

先週、宏邦に紹介された本。

「この話で用いられる、人同士の出会いを、花が開くための蕾にたとえるという表

現は、ありきたりだけど面白いと思いました。この人のデビュー作を読んだことがあります。正直、面白いだけの代物でした。この作品は、デビュー作よりも繊細に作られています。僕には、この作品が、作者がヒットするための『蕾』であるように感じました」

以上ですと締めくくり、壇上から去る。

我ながらクサイ台詞だったと思う。周りの視線を見ないようにしながら席まで戻る。刹那、宏邦と目が合った。

宏邦は、顔を真っ赤にしていた。羞恥？いや、違う。高揚だ。

「宏邦」

授業終わり、おれは思わず彼女に話しかけた。

「ど、どうしたの？村田くん」

動揺が隠しきれていない。一体なにがあったというのだ。

「顔、真っ赤だったけど」

宏邦は肩をギクリと跳ねらせる。

「驚かないで聞いてほしいんだけど……」

そう前置きして、宏邦は衝撃的な台詞を吐く。

「あの本書いたの私」

「は？」

思わず大きな声が出た。慌てて声を低くする。

「もしかして、お前が国枝シヨウ？どうりで強く薦めてくると思った！」

「ご、ごめん。自分の本読んでくれた人、初めて会ったから。まさかあそこまで褒められるとは……」

宏邦は、羞恥に耐えきれず視線を外した。

よく考えてみれば、ペンネームにいくつもヒントはあったのだ。梢とは枝先のことだし、シヨウとも読める。

「国」は「邦」に言い換えられるのと言わずもなだ。さきほどの発言は

も説明がつく。

「なんかしてやられた気分」

「ふふふ。ごめんね」

舌を出して笑う宏邦を、怒る気分にはなれなかった。

「ちゃんと読んでもらえて嬉しかった。今度はちゃんと、一発で面白いってわかるから」

不敵に笑う彼女は言う。

ああそうか。これが、彼女の言う蕾——きっかけなのか。

自分が本を読むための、彼女と関わるための。

そう思ったとき、口からは自然に言葉が出てきていた。

「わかった。楽しみにしてる」

会話のテンポが良く、学園ドラマを見ているかのようなさわやかな印象を受けた。登場人物に感情移入しやすく、作品の感想を問いつめられるところなど、ハラハラして目を閉じたくなった。記号（固有名詞）トリックは親しみやすいので、親切なネタバレ解説は省き、文末でペンネームを明かすとタイトル回収がもう一步深まると思われる。

河原林 晶子先生

ぐいぐい作品の感想を聞き出そうと迫る「邦宏梢」の真意は何なのかと気になっていました。結末としてその意味が明かされたことで、心の中でストンと納得する答えが生まれたように感じます。

もし物語の続きが読めるとするなら、これからの二人の関係性が楽しみです。ね。

クリブニュース広報班

受賞者への賞品進呈式

2023年12月20日に実施しました。

授賞式の様子は中京大学図書館公式 Instagram にて紹介いたします。

※Instagram アカウントに関しては、以下の QR コードを参照してください。

惜しくも入賞を逃してしまった作品について

今回集まった作品はどの作品にも良い点があり、審査が難航しました。

そのため、入賞とはなりませんでしたが、私たち中京大学図書館広報隊の面々が、「ここが良かった」というポイントを挙げて未受賞の作品を紹介することにしました。

クリブニュース増刊号をお楽しみに！

【お得情報満載！】中京大学図書館 公式 SNS アカウント紹介

① X (旧Twitter)

図書館に直接かかわる情報を知ることができます。



Xアカウントはこちらから

② Instagram

広報隊メンバーが図書館に関する情報を発信するアカウントです。



Instagramアカウントはこちらから

③ Facebook

イベント情報や図書館の開館日時などを知ることができます。



Facebookアカウントはこちらから

編集後記

今号の編集は、前任者が一人しかいないという状態で行われましたが、これまでの内容を踏襲しつつ、新しいクリブニュースを制作することに集中しました。

メンバーの予定が合わない中でも、協力し合って最善の結果を出すことができたと考えています。

また、今回は「クリブニュース募集企画」の募集にご参加、ご協力いただき、誠にありがとうございました。

多くの方からのご応募があり、審査する側としては喜びとともに読ませていただきました。

最後に、審査にご協力いただいた文学部の先生方にも心から感謝申し上げます。

クリブニュース広報班一同

Special Thanks !

- ・ 中京大学図書館
- ・ 学生協働ボランティアのメンバー
- ・ 募集企画に参加してくれた方々
- ・ 酒井敏先生
- ・ 中川豊先生
- ・ 河原林晶子先生

クリブニュースの制作にご協力いただき、大変感謝いたします。